

## 語彙力を育てる英語科学習指導

本研究は、基礎的・実践的コミュニケーション能力に結びつく語彙力を育てる学習指導法の工夫・検証を行ったものである。その結果、計画的な学習語彙の選択と、現物・ゲーム・絵などを使った音声からの導入を基本にすえた学習指導を、「一定の間隔」をおいて「繰り返し」行なうことによって、実際のコミュニケーションの場で使える語彙力が育っていくことが明らかになった。

## 第 章 研究の基本的な考え方

1	主題設定の理由	英	1
2	主題についての基本的な考え方	英	2
3	研究の目標	英	2
4	研究の仮説	英	2
5	研究の内容	英	2
	( 1 ) 学習する語彙の選択について	英	2
	( 2 ) 語彙の指導方法についての工夫	英	2
6	語彙学習と語彙指導		
	( 1 ) 語彙学習とは	英	4
	( 2 ) 語彙学習指導	英	5
	( 3 ) まとめ	英	6

## 第 章 研究の実際とその考察

1	A 中学校 1 年生	英	6
2	B 中学校 1 年生	英	10

## 第 章 研究のまとめと今後の課題

1	研究のまとめ	英	13
2	今後の課題	英	14

引用・参考文献

## 第 章 研究の基本的な考え方

### 1 主題設定の理由

日本人がその技術や特技などを生かし、世界各国で仕事や生活をしたり、また、国際的な会議や交流の場で発言したりする機会が年々増えてきている。その際、英語を使ってコミュニケーションを図ることは当然必要なこととみなされており、英語を使って自分の意志を伝えることのできる日本人の育成が求められている。英会話スクールや英語に関する出版物など、英語学習に関する支出は昨年度、3兆円にものぼったと言われている。日本人の「英語熱」は高まりをみせている。また、文部科学省は、「英語が使える日本人の育成」のための行動計画を発表し、英語科教育の改善の目標や方向性を明らかにしようと取り組んでいる。

このような現状を踏まえ、中学生の段階では英語を使って「基礎的なコミュニケーション能力」を身に付け、自分の身近なことや考えを表現し、また相手の意思を理解する能力を身に付けることが必要とされている。

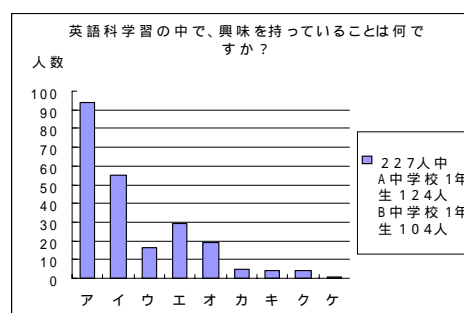
しかし、現状は英語を使ってコミュニケーションを図る場面では十分にコミュニケーションを図ることができない、とっさに使いたい英語が思い浮かばず、とまどってしまうという意見が多い。

生徒のアンケートでは、「英語科学習の中で、興味を持っていることは何ですか」という質問に対しては、「英語で日常会話をできるようにすること」という回答が最も多かった。次に多かったのは「高校入試に役立つ英語の力を身につけること」であった。一方、「英語科学習の中で、苦手なことは何ですか」という質問に対して、「単語や英文を覚えること」という回答が最も多かった。次に多かったのは「単語や英文を英語らしく発音すること」「単語や文などの英語を書くこと」という回答であった。これらのことから、単語を覚えたり書いたりするこ

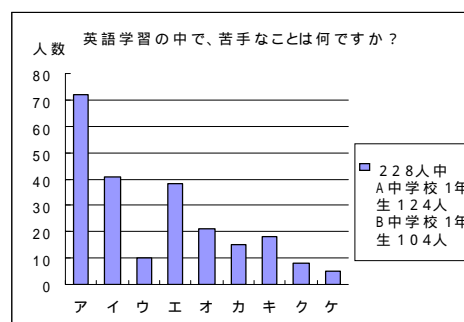
とに苦労している生徒はかなり多いと言える。しかし、生徒が最も力をつけたいと思っている「英語で日常会話をできるようにすること」、いわゆる基礎的・実践的コミュニケーション能力をつけるために、語彙学習は最も基礎・基本となる重要な学習である。

以上のことから、本年度は生徒の語彙力を育てる学習指導法を研究し、実際に効果をあげることを目指したい。

資料 - 1 生徒のアンケート



- ア：英語で日常会話をできるようにすること
- イ：高校入試に役立つ英語の力を身に付けること
- ウ：英語らしい発音を身に付けること
- エ：英語を聞いて理解できるようにすること
- オ：自分の伝えたい事を英語で表現できるようにすること
- カ：英文を読んで意味を理解できるようにすること
- キ：英文を音読できるようにすること
- ク：英文法を理解できるようにすること
- コ：その他



- ア：単語や英文を覚えること
- イ：単語や英文を英語らしく発音すること
- ウ：英語を聞くこと
- エ：単語や文などの英語を書くこと
- オ：英語を使って会話すること
- カ：英語の文法
- キ：英語を読むこと
- ク：英文の意味を理解すること
- ケ：その他

## 2 主題についての基本的な考え方

### (1) 語彙とは

語彙とは、ある一つの語彙体系で用いられる単語の総体である。

### (2) 語彙力とは

語彙力とは、一般的には、語彙の総量、つまり、どのくらいの数の単語を知っているかを意味すると考える場合が多い。本研究では、語彙力を語彙知識の総量ととらえる。

## 3 研究の目標

「基礎的・実践的コミュニケーション能力」を伸ばすために、語彙力を育てる学習指導法を究明する。

## 4 研究の仮説

語彙の導入と定着方法を次の から の順番  
興味・必要性の喚起  
現物等の提示  
モデル発音の提示  
発音の練習（発音の模倣）  
スペリングの提示  
スペリングの練習  
用法の説明  
単語を用いた自己表現練習

で行うことを基本に据え、内容や、回数に留意して、繰り返し指導を行うことによって、実際のコミュニケーションに生かすことのできる語彙力が育つであろう。

## 5 研究の内容

### (1) 学習する語彙の選択について

中学校学習語彙900語だけでは、コミュニケーション活動には結びつけられない場合もある。そのためには、教科書を膨らまし、生徒にさらに多くの単語に触れさせる必要がある。したがって、それ以外の語彙をどう選択して生徒に教えるかがコミュニケーション能力の育成にとって非常に重要である。中学校の段階では、下記のような視点に立って学習語彙を選択する。

### ア 基本語

教科書の単語の中で「中学校学習指導要領」に示されている900語（資料「英語基本語一覧」参照）

### イ 追加して学習する単語・連語

#### 日常的な単語・連語

教科書には出ていないが、日常的に頻繁に使われ自己表現に必要なと思われる単語・連語

#### 生徒の望む単語・連語

生徒が自ら知りたいと要望してきた単語・連語や要望するだろうと思われる単語・連語

### (2) 語彙の指導方法についての工夫

(1)で述べた方法で選択した単語・連語を、生徒にとって単なる知識で終わらせず、実践的コミュニケーションに使えるようにするためには、指導方法の工夫が必要である。基礎的・実践的コミュニケーション能力に結びつくための語彙指導法の大きな柱を次の2つと考える。

#### ア 視覚的教材を使った音声からの導入

語彙指導においては、フラッシュカードを使い、発音の練習と意味の確認を行い、（プリントで書く練習をすることもあるが宿題として家庭学習になることもある。）次の時間に単語テストという指導方法が多い。アンケート結果からも、単語を覚えることを苦手としている生徒が多いことがわかる。単語が発音できない、また書けないことで英語学習の意欲をなくしている生徒がいる。この原因は、生徒が英語の綴りは、表音文字であるということを理解していないからである。したがって、語彙の指導方法は、できる限り音声から導入し、その発音を文字にかえるという指導方法が望ましい。そこで、次のような指導方法の例が考えられる。

#### 名詞・形容詞・前置詞...絵や写真を活用

・コンピューターのインターネット

・デジカメで撮った写真

・イラスト集

動詞・副詞...ジェスチャーゲームや連想ゲームなどを活用

基礎的・実践的コミュニケーション能力

語彙力の育成

語彙学習の指導方法

繰り返し学習

定

着

導

入

ステップ3

単語・連語を用いた自己表現練習  
スペリングの練習 (確認テストを含む)  
\* 生徒の実態に応じて活動項目の決定

↑ 間隔をあける

ステップ2

単語・連語を用いた自己表現練習  
スペリングの練習  
発音の練習  
\* 生徒の実態に応じて活動項目を決定

↑ 間隔をあける

ステップ1

単語・連語を用いた自己表現練習  
用法の説明  
スペリングの練習  
スペリングの提示  
発音の練習 (発音の模倣)  
モデル発音の提示  
現物等の提示  
興味・必要性の喚起

学習語彙の選択

・教科書の語彙  
・生徒の望む語彙  
・日常的な語彙

生徒の実態

・視覚的な教材に興味を示す  
・単語が苦手な生徒が多い

↑ 語彙力

意味  
meaning

スペリング  
spelling

発音  
pronunciation

用法  
usage

結びつき  
collocation

図 1 < 研究の構想図 >

## イ 繰り返し

語彙の定着を図るには、研究の構造図のステップ1 ~ の学習を最低3回程度繰り返すことが必要である。ただし、ステップの学習内容についてはステップ1 ~ の学習をすべて行うのではなく、ステップ2、ステップ3と繰り返すにつれ、生徒の学習段階に応じて内容を削除し指導する。また、生徒の習熟度に応じて繰り返しを増やすことが望ましい。

## 6 語彙学習と語彙指導

### (1) 語彙学習とは

語彙学習の重要性は1970年以降再認識されるようになってきた。特にコーパスが英語教育へ利用されるようになってからは、語彙の重要性をその使用頻度順に置き、より効率的な語彙学習の研究が進められている。英語によるコミュニケーションを図る能力の養成という英語教育の目標の視点から見れば、語彙学習は何よりも先んじて行なわなければならないものである。それは Wilkins (1976) が述べたように、『文法を学ばずにコミュニケーションを図れることはほとんどないに等しいが、語彙を学ばずにコミュニケーションを図れるものは全く無い』からである。

日本の中学校における英語教育で行なう語彙学習では、学習内容を明確にし、どのような語彙をいくつ、どのような方法で学習すれば効率が良く、また定着度も高いかを考えなければならない。

語彙学習において必要とされる語彙知識について、Nation (1990) は次の8項目を挙げている。

- ・ 語彙の意味を知ること
- ・ 語彙の表記（スペリング）を知ること
- ・ 語彙の発音を知ること
- ・ 語彙の用法を知ること
- ・ 語彙と語彙の結びつきを知ること
- ・ 語彙の使用域を知ること
- ・ 語彙の派生語を知ること

- ・ 語彙の使用頻度を知ること

上記の8項目の語彙知識を全て学習できることが理想的であることは言うまでもないが、実際の授業の中で新出語彙のこれら全ての項目を生徒が常に学べるような指導を行なうことは難しい。最初の5項目までは新出語彙の学習時に学習するべき内容であると考えられるが、残りの3項目は学習を進行する中で徐々に学習させていく類の知識内容であろう。

次に学習する語彙の選択の問題であるが、Howatt (1984) は選定基準として次の7項目を挙げている。

- ・ 使用頻度
- ・ 文法構造上の重要性
- ・ 普遍性（地域性の強い語彙を避ける）
- ・ 一般性（特定の分野に限られていない語彙）
- ・ 辞書用語（辞書作成で使用されている語彙）
- ・ 連語能力の高い語彙
- ・ 文体（スラング等は避ける）

近年のコーパス研究(Francis and Kucera, 1982)では、使用頻度の高い2,000語は英語圏で使用されている英語の約80パーセントを占めていることから、初心者では2,000語程度を目安に教育するのが適当であるという考え方がある。知らない語彙があっても推測により意味がわかるためには、テキスト全体の95%程度の語彙を知っていなければ難しいことを考慮すれば、全体の95%を網羅する語彙数は約15,000語程度となる。しかし、10代向きに書かれている英語小説では使用頻度の高い約3,000語が使用されている英語の95%以上を占めることになるので、外国語として学習するのに適当な語彙数を2,000~3,000語とする考え方もある。

(Hirsh and Nation, 1992)

また、使用頻度の1位~100位までの語彙が、使用されている英語の全体の約50パーセントに当たることがわかっており、しかもそれらの語彙のほとんどが機能語であることもわかってい

る。(Nation and Waring,1997)

I.A. Richards (1947) は850語を Basic English として提案したが, Nation (1983) は, これらの 850 語には 12,425 の異なる意味があると述べている。一方, スピーキングやライティングによる自己表現に必要な語彙はリスニングやリーディングに必要な語彙とは比較にならないほど高度な語彙を要することが指摘されている。(Nation, 1990)

現在, 中学校の学習指導要領では, 機能語 100 語のみが記載されており, 3 年間で学習すべき語彙数は, それら 100 語を含む900語程度と規定されている。これは生徒が学習する語彙の選択が検定教科書編集者や教師に委ねられていることになり, 選択の範囲が広がった反面, 選択された800語が検定教科書によって異なることも意味している。また, 教科書に使用された語彙の全てが, 使用頻度の高い順に選択されているとは考えられない。なお, 学習指導要領で記載されている100語は, ほとんどが機能語であるため音声や文字による認識は比較的簡単であるが, その用法や他の語彙との結びつきなどは多様である。そのため繰り返し用法を学習すること, 前出の用法との比較対照することや結びついた語彙と共に学習することが重要となる。

実際の授業での語彙学習では, 教科書で使用されている語彙であっても, 使用頻度によりぜひ定着させたい語彙と重要性が低い語彙を区別しながら学習をすすめてゆくことも考えなければならない。いずれにせよ生徒の持つ母語の語彙数に比べると, 授業で学習する英語の語彙数は極端に少ないので, 生徒が知りたいと望む語彙があれば, 例えテキストで使用されていない語彙であっても, 教師が学習支援を行ない, その語彙を用いて自己表現できるように導くことが大切である。特に日常的に目に触れる物や状態, 動作を示す語彙はなるべくたくさん知っておいて欲しいものである。

## (2) 語彙学習指導

語彙学習指導を行なう際, まず前提として次

の5項目を生徒に教えておかなばならない。

- ・英語圏の文化と日本の文化の違いにより, ある単語の持つ意味の範囲とそれに相当する日本語の持つ意味の範囲は異なることがあること
- ・英語の場合, 1つの単語に複数の意味がある場合が多いこと, また1つの意味を表すのに, 複数の語彙があること
- ・英語の発音には日本語にない発音が含まれていること
- ・英語の場合, 文字と発音が一致しない場合が多いこと
- ・英語の発音は強勢の有無により, 同じ語でも異なる発音がなされること

これらの点は教師にとっては当たり前のことであるが, 中学校で初めて正式に英語を学習する生徒にとって, 知っていなければ学習する上で大きな混乱を招く原因となるので, 常に新出語彙の学習の際には, 生徒が意識できるようになるまで留意させる必要がある。

### ア 語彙の導入指導の考え方

語彙学習指導に当たって語彙の意味と発音と用法(文法)をバランスよく指導することが重要であることは当然のことであるが, それを具体的にはどのように実施したらよいかが実際の教育現場ではより差し迫った課題である。太田垣(1999)は新語の導入順序の変更を提案している。一般にわが国で行なわれているのは次の順番である。

英語のスペリング 発音 意味 練習

これを入門期の学習では のような自然な言語習得順序に改善した順序を提案している。

ゲーム, 連想等によりその語彙の必要性や語彙に対する興味を喚起する 現物等の提示 発音 発音の模倣 スペリングの提示 書く練習 その語彙の働きの説明

さらに中級レベルでは既習の学習内容を利用して学習者の推測能力を活用することの重要性を強調している。

実際の教育現場では, 時間の制約や語彙の性

質により現物提示の困難性があるため、効率性とより高い学習効果を狙い、と の方法を臨機応変に使用するのが良いと思われる。さらに欲を言えば、学習した語彙を用いて簡単な自己表現を行なう練習ができることが望ましい。

#### イ 語彙の定着指導

一度導入した語彙を定着させることも重要な語彙学習指導の内容である。繰り返し学習することで定着を図る以外、定着方法はないのではあるが、より定着率の高い繰り返し学習方法があればそれに越したことはない。竹蓋 (1997) はヒヤリングの向上が他のスキルの向上に一番大きな相互作用を与えることから、3ラウンド制ヒヤリング指導理論を構築した。これはタスク学習を行う過程で、少なくとも9回は同じ素材を繰り返し聞きくことになるように仕組みられた学習指導法であるが、その繰り返しは連続的に同じ素材を繰り返して学習するのではなく、最初のラウンドでは大まかな内容を理解するタスク学習を、やや間隔を置いて2ラウンド目に詳細を理解するタスク学習を、さらに間隔をおいて3ラウンド目では言語以外の話者の意図や要旨、感情や態度を理解するタスク学習へと進む指導理論である。つまり、バリエーションのある繰り返しと繰り返しの間に間隔を置くことが、定着度を高め、より効率的であることを示した。

実際の中学校の教育現場では、新しい表現、文型や文法事項の導入の際に既習語を繰り返し駆使することにより、何度もバリエーションを伴った語彙の繰り返し学習が可能である。また、繰り返して学習する語彙の提示はやや間隔をおいた方がより定着率が向上するのであれば、そのように既習語彙の提示するタイミングの工夫も可能である。つまり、教師はどのような語彙をどのような文法事項や表現の学習時に繰り返し用いて学習させることができるかをあらかじめ検討し、例文を示すのに用いる語彙や練習問題やタスク学習に使用する語彙を準備しておけばよい。このようにして、単純な繰り返しによる暗記学習ではなく、変化と間隔を置いた繰り返し

学習により、生徒は自然に何度も既習語彙を用いた表現に接する事となり、語彙の定着が図れるであろう。このような変化を伴う既習語彙の繰り返し学習は、既習語を用いた自己表現にまでに発展させることが容易にできるため、生徒の実践的コミュニケーション能力を伸ばす原動力ともなる。

#### (3) まとめ

語彙学習は英語のコミュニケーション能力を養成する上で最初に行なわれる必要なスキルの取得のための学習である。もちろん知っている語彙数は多ければ多いほどコミュニケーションを図る上では良いのではあるが、学習の効率性、生徒の学習に対する興味関心の持続性、母語の語彙数との格差等を常に考慮しながら指導語彙を選択し、より楽しく、定着性を高め、しかも生徒の知的好奇心を満足させるような語彙導入の指導方法と繰り返し学習による定着の指導方法を工夫することが必要である。

(久留米工業大学助教授 山内ひさ子)

## 第 章 研究の実際とその考察

### 1 A 中学校 1 年生

#### (1) 生徒の実態

本学級の生徒(男子17名、女子16名)は他の1学年の学級と比べると、落ち着いた学級である。英語学習に対しても、授業態度もとても良く、真面目に取り組んでいる。しかし、英語に興味は持っているのだが、英語を話すことに慣れておらず、恥じらいもあり、発音練習などの時には声が小さくなり消極的な場面も見受けられる。また、生徒の中には、英単語を覚えることに苦勞している生徒もあり、語彙力を伸ばすことが必要と思われる。

#### (2) 語彙学習指導の実際

次のように学習する語彙の選択と語彙学習計画を立て、検証授業を行った。

次のページ(4)語彙学習計画が示すように、目

標文（言語材料）が名詞を学習することに適したものである。ここでは、動物の単語を取り上げ学習することにした。さらに、生徒の要望と使用頻度が多いと思われる動物の単語を追加して学習する単語として取り上げた。

学習する単語の選択については、重要度の高い語と理解程度にとどめる単語とを考慮し指導する。下記の表のア基本語をしっかりと身に付けさせることに留意する。イ追加して学習する単語については、教科書には出てきてはいないが、日常よく耳にし、知っておいた方がよいと思われる単語を目標文の練習に必要な数も考慮し、10単語選択した。今回の動物の単語は、理解語彙として定着させることを第一の目標とし、スペリングの提示・練習はするが、必ずしも表現語彙として自由に書けるところまでは目標としない。

（注）理解語彙：listening, readingなど、文字通り言語を理解するときに用いられる語彙  
表現語彙：speaking, writingなど、言語を表現するときに用いられる語彙

### (3) 学習する単語

基本語	dog(Let's start 3) lion(Let's start 3) animal(Program12-2)		
追加して学習する単語	cat	snake	ant
	rabbit	elephant	
	giraffe	monkey	
	penguin	panda	spider

### (4) 語彙学習計画

ステップ1 <導入>	単元	Program 4
	目標文	How many 名詞 do you see?
ステップ2 <定着>	単元	Program 7
	目標文	How do you say-in English?
ステップ3 <定着>	単元	Program 9
	目標文	Where is-?

### (5) 検証授業

ア <検証授業1(9月実施)>

(ア)題材名

Program 4 同じこと、違うこと

(イ)本時の指導

まず始めに、動物の絵を描いたカードを使って、画用紙を切り抜いた物をその上にのせ、動物の絵が全部見えないように隠して、生徒にどんな動物なのかを想像させる連想ゲームを行った。(ステップ1, )その後、カードの動物の絵を見せながら発音の練習を全員で行った。(ステップ1, )さらに、動物の単語と目標文のHow many ~?の文を使ってペアで質問を作り、クイズを出し合う自己表現練習を行った。(ステップ1)最後に黒板に動物の絵を貼り、その横にスペリングを書き、それぞれのプリントに練習をさせた。(ステップ1, )本時の目標文は、口頭で言いながら意味や用法が理解しやすいものであったので、書くことは最後に行うことにした。(ステップ1)

資料 - 2 学習指導案(検証授業1)

資料	学習計画	指導の留意点	評価の観点	形態	時間
導入	1. 英語で挨拶をする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大きな声で呼びかける。</li> <li>・テンポ良くおこなう。</li> <li>・わかりやすく言う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・単語学習に積極的に参加し、単語を発音しながら覚えようとしているか。</li> </ul>	全員	1
	2. 簡単な会話をする。			個人	3
	3. 本時の目標を確認する。			全員	1
	4. 動物の英語を絵カードを使って練習する。 ・ Look at this card. ・ What is this animal? ・ It's a ~.			全員	6
	5. 新出文型を理解し、発音練習をする。 ・ How many 複数形 do you see ~? ・ I see 数字 動物。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語での説明は、極力避け英文の意味を想像させる。</li> </ul>	全員	6	
展開	5. 動物の単語を使いながら、先生のクイズに答える。 例・How many cats do you see? ・ I see 数字 cats.	<ul style="list-style-type: none"> <li>・何回も言わせ定着を図る。</li> <li>・覚えた動物の単語をきちんと使っているか確認しながら行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・覚えた新しい英語表現と動物の単語を積極的に使おうとしている。</li> </ul>	個人 全員	6
	6. ペアをつくる。 7 ・ 5. の活動で使ったプリント見ながらペアでHow many を使った質問を考え発表する。 ルール 全員立つ、質問を考え前で見せたグループは答えることができる。質問に答えたグループが次の質問者になることができる。 8. 動物の単語と新出文型を書く練習をする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・くじを使い、動きを入れることで活発な活動の雰囲気をつくる。</li> <li>・ペアができているか確認をする。</li> <li>・ルールを明確に伝える。</li> <li>・グループの全員で質問を発表するようにする。</li> <li>・全員書けるように支援する。</li> </ul>		個人 ペア	3 15
	9. 次時の予告を聞き、終わりの挨拶をする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 終わりという雰囲気を作る。</li> </ul>		全員	1

(ウ) 考察

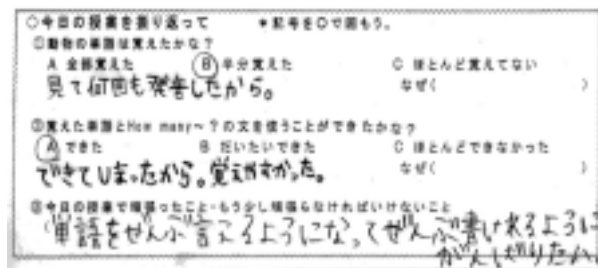
導入時に連想ゲームを取り入れたことは、生徒の単語に対する興味を高めることができたと思う。絵を使った発音からの導入で、単語を覚えることを苦手としている生徒も学習に不安を感じることなく取り組んでいる姿が見られた。動物の単語は、日常よく耳にする単語であり、生徒の興味を引きつけることができた。また、それらの語をまず始めに学習したことで、その後の目標文の理解や自己表現活動をスムーズに行うことができた。書くことに関しては、必ずしもすべての単語を書くことができるようになることを目標にはしていなかったが、最後にスペリングの提示をし練習を行った。しかし、この時間内では、まだ不十分であった。(資料 3, 4, 5)

資料 3 生徒のアンケート

10個の単語のうち何個覚えることができましたか？(書くことも含む)

覚えた単語の数 (10個中)	回答者数
0個	1人
1個	0人
2個	2人
3個	3人
4個	4人
5個	4人
6個	1人
7個	3人
8個	5人
9個	2人
10個	3人

資料 4 生徒の感想と授業中の様子



資料 5 生徒の学習プリント



(ア) 題材名

Program 7 タコマの牧場で

(イ) 本時の指導

動物10単語の学習については、2回目である。前回学習した単語を発音できるか、書けるか、生徒に前回と同じ動物の絵を載せたプリントを配り各自で確認を行った。そして、書けなかった単語をプリントの中に練習させた。

その後、How do you say 動物 in English? の文を使いながら、発音・スペリングの確認と発音練習を行った。(ステップ2 ) さらに、2人のグループをつくり、お互いに尋ねあうという自己表現練習を行い、目標文と単語の定着を図った。(ステップ2 )

(ウ) 考察

単語の発音は、前回よりもスムーズに言えるようになった。ステップ1とステップ2との間隔が約2ヶ月あいているので忘れていた単語もあったが、以前学習した単語の繰り返しと言うことで、思い出すことも早かった。本時のさらなる練習で、より定着が図れたと思う。目標文を使ってお互いに尋ねあうという自己表現練習の中でも、動物の単語を使いながら英文を言えるようになった。しかし、生徒のプリントからわかるように、書くことは定着が遅く練習が必要であることがわかる。(資料 - 6, 7)

ウ < 検証授業3 (1月実施) >

(ア) 題材名

Program 9 カードをもらってうれしいな

(イ) 本時の指導

各自、動物の絵のプリントで何個発音できるか、また何個書くことができるか確認させた。その後、前回での学習で書くことが定着していないことがわかったので、書く練習に時間をとり定着を図った。(ステップ3 ) 同時に、本時の目標文であるWhere is ~? の文を動物の単語を使いながら各自作り発表しあった。(ステップ3 )

10個の単語のうち何個発音できましたか、また書くことができましたか? 学習生徒30人

単語の数	10個中	発音できた人数	書くことができた人数
0個		0人	1人
1個		0人	3人
2個		0人	8人
3個		0人	0人
4個		0人	3人
5個		0人	1人
6個		3人	3人
7個		3人	2人
8個		0人	4人
9個		7人	3人
10個		17人	2人

資料 - 7 生徒の学習プリント



(ウ) 考察

同じ単語を3回学習したことによりほとんどの生徒が8～9個の動物の単語を言えるようになった。「また繰り返すのか」という発言もあったが、自信もうかがえた。Where is ~?を使った言語活動でも活発に発言する姿勢が見られた。しかし、生徒のアンケートから書くことの定着がまだ十分でないことが明らかになった。

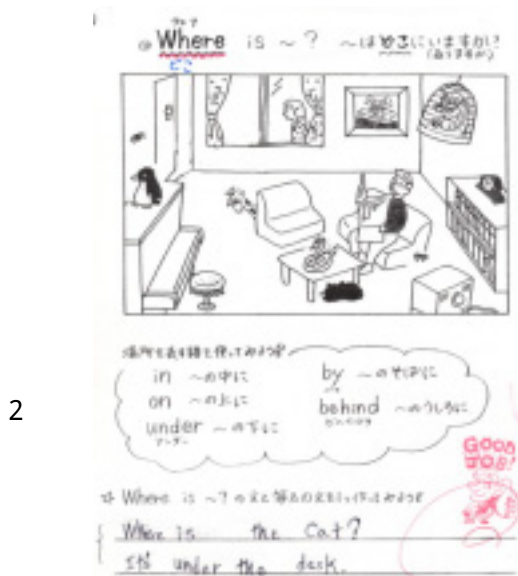
(資料-8, 9)

資料 - 9 生徒のアンケート

10個の単語のうち何個発音できましたか、また書くことができましたか？ 学習生徒29人

単語の数	10個中	発音できた人数	書くことができた人数
0個		0人	2人
1個		0人	2人
2個		0人	5人
3個		0人	6人
4個		0人	4人
5個		2人	2人
6個		0人	3人
7個		0人	2人
8個		3人	2人
9個		5人	0人
10個		19人	1人

資料 - 8 授業の様子



2 B中学校1年生

(1) 生徒の実態

本学級の生徒は(男子18名, 女子16名)声を出して英語の発音をしたり, 歌を歌ったりすることは得意である。また, ALTが来校した際は, 知っている英語をつなぎあわせ, 積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿も見られる。しかし, 既習の語彙や表現では気持ちや十分に伝えることができないことが多い。

また, 英語を書くことを特に苦手としている生徒が多く, 定期テストなどの成績はあまりよくない。また, 家庭学習が不足している生徒も多く, 定期テスト前を除き, 家庭では全く学習していないと答えた生徒が全体の40%もいるのが現状である。

(2) 語彙学習指導の実際

生徒の実態から, 以下に示すコミュニケーション活動に使える語彙を身につけることに重点を置いた。

教科書にない語彙でも, 生徒の学習段階に見合ったもので, なおかつ使用頻度などにおいて必要性が感じられるものであれば積極的に学習させる。

学習の際は, 理解語彙と表現語彙の区別を明確にする。

繰り返し学習することで語彙の定着を確実なものにする。

(3) 学習する連語

基本語	play tennis(3-1)	study English(4-3)
	go to school(6-3)	go to bed(CandU4)
	watch TV(CandU4)	read a book(CandU4)
追加して学習	get up	have breakfast
する基本語	have lunch	have dinner

(4) 語彙学習計画

ステップ1	単元 Program 6
<導入>	目標文 Kenny playing tennis.
ステップ2	単元 Program 8
<定着>	目標文 Nancy likes oranges.
ステップ3	単元 Program 9
<定着>	目標文 I played tennis last Sunday.

(5) 検証授業

ア<検証授業1(10月実施)>

(ア) 題材名

Program 6 同じこと、違うこと

(イ) 本時の指導

生徒にとって身近な中学生の一日の生活を表すための動詞を、資料-10のような絵や、ジェスチャーを使って提示し、何をしているのかを答えさせた。(ステップ1, ) それらの動詞は中学校1年生のこの時期に学習すべき基本語として取り扱われているわけではないが、生徒の学習段階に見合った連語であり、使用頻度などにおいて必要性が感じられるものである。

資料-10 行動を表現している絵



その後、それらの動作を表す動詞を教師がジェスチャーで示し、それに続けて生徒が繰り返し、発音練習を行った。(ステップ1, )

さらに、それらの動詞の用法を例文を提示しながら説明し、(ステップ1) それらを用いて主語を変えながらオーラルでのドリル練習を行った。(ステップ1)

最後に副教材のワークを用いて、本時の学習内容のまとめを行った。

(ウ) 考察

発表分析、生徒のアンケートの結果から、資料-11のような結果が得られた。

資料-11 生徒のアンケート集計結果

1. 10個の動詞の意味をどれくらい覚えましたか。	
9個以上	30人
7~8個以上	3人
6個以下	0人
2. 10個の動詞の発音ができるようになりましたか。	
ほとんど完璧	31人
少し自信がない	2人

今回の授業で目標にしていた連語の意味とその発音を覚えることは、ほぼ達成できたと言える。しかし、時間が経つと何人の生徒がいくつ記憶することができているのかわからない。次回の検証授業で同じ動詞を学習し、さらに定着させることを目指したい。

また、今回はスペリングの提示はしていないが、次回の学習ではスペリングを提示し、書く練習を取り入れることで、これらの動詞を表現語彙に高めることを目標にする。

イ<検証授業2(12月実施)>

(ア) 題材名

Program 8 Eメールを書こう

(イ) 本時の指導

10月に実施した検証授業で取り扱った、生徒にとって身近な10パターンの動詞を繰り返し学習することで、連語の定着を確実なものにすることを目指した。

まずは復習のため、教師のモデル発音に続けて繰り返し発音練習を行った。(ステップ2)

次に、これらの動詞を用いて、本時の新出言語材料のドリル練習を行い、その後、自己表現練習を行った。(ステップ2)

さらに、今回は書く練習を取り入れた。資料-12のように、ワークシートに練習できるスペースを作り、一語につき最低5回ずつ書いてくことを宿題にし、それらを次の時間に集め、点検して返した。(ステップ2)

PROGRAM 8 「Eメールを書こう」

1. 次の語を音読し回すつ練習しましょう。

English	Japanese	Practice
1. get up	起きる	Get up get up get up get up
2. have breakfast	朝食を食べる	have breakfast eat breakfast have breakfast eat breakfast
3. go to school	学校に行く	go to school go to school go to school go to school
4. study English	英語を勉強する	study English study English study English study English study English study English
5. have lunch	昼食を食べる	have lunch eat lunch have lunch eat lunch have lunch
6. play tennis	テニスをする	play tennis play tennis play tennis play tennis play tennis
7. have dinner	夕食を食べる	have dinner eat dinner have dinner eat dinner have dinner
8. watch TV	テレビを見る	watch TV watch TV watch TV watch TV watch TV
9. read a book	本を読む	read a book read a book read a book read a book read a book
10. go to bed	寝る	go to bed go to bed go to bed go to bed go to bed

2. あなたたちのグループが作った文を書きましょう。

1. This is Shiki Hanae.
2. She likes yellow.
3. She likes Pooh.
4. She is playing basketball.
5. Thank you.

3. 自己評価

① グループ活動に積極的に参加することができましたか。 (A) B C  
 ② 発表のとき、聞く人におかりやすく伝えることができましたか。 A (B) C  
 ③ 発表のときあなたが一番勇気を付けたことはどんなことですか。  
 <英語の発音や強弱に気を付けました。>

(ウ) 考察

生徒のアンケートの結果から、資料 - 13のよ  
うな結果が得られた。

資料13 - 生徒のアンケート集計結果

1. 10個の動詞を今回も学習しました。連語の意味を前  
回よりしっかり覚えることができましたか。

はい・・・・・・・・・・ 32人  
 いいえ・・・・・・・・ 0人  
 その他・・・・・・・・ 1人

2. 10個の動詞の発音ができるようになりましたか。

完璧・・・・・・・・・・ 33人  
 少し自信がない・・・ 0人

3. 10個の動詞を英語で書くことができますか。

完璧・・・・・・・・・・ 16人  
 ほとんど書ける・・・・ 10人  
 少し自信がない・・・・ 5人  
 まったく自信がない・・・ 2人

前回と今回の授業で連語の意味とその発音を  
定着させることは、ほぼできたと言える。時間  
が経過すると記憶が曖昧になることもあるが、  
生徒の学習段階に適した連語であれば、容易に  
記憶を呼び起こし、定着させることができると  
がわかった。

また、今回の学習ではスペリングを提示し、  
書く練習を取り入れることで、これらの動詞を  
表現語彙に高めることを目標とした。アンケー  
トの結果からわかるように、しっかり覚えて、  
書けるようになったと答えた生徒は半分しかい  
なかった。このことから発音や意味を覚えるこ  
とより、書けるようになることの方が生徒にと  
って困難であることがわかった。来月（1月）  
に行うテストでは、書く力を検証する。

ウ<検証授業3（1月実施）>

(ア) 題材名

Program 9 手紙をもらってうれしいな

(イ) 本時の指導

前回行った検証授業では、動詞のスペリング  
を提示し、書く練習を行った。

今回はそれらの動詞の音読練習を行い、意味  
を確認した後、学習した10個の連語について、  
日本語から英語に直すテストを行った。（ステ  
ップ3）

(ウ) 考察

今回のテスト結果は資料 - 14のようになった。

資料14 - テスト結果

～ テストの結果（10問出題）～

全問正解・・・・・・・・ 7人  
 8, 9点・・・・・・・・ 13人  
 5～6点・・・・・・・・ 9人  
 5点以下・・・・・・・・ 4人

繰り返し学習した連語なので全問正解者、ま  
たは8, 9点得点者が日頃行っているテストの  
2倍位でた。このことから、連語を繰り返し学  
習することで、書く力を定着させることができ  
ることがわかった。

4 計画

A/B	活動内容	留意点	評価規準 (評価方法)	評価基準		Cと判断する場合に対する手立て
				A	B	
	Eメールを書く!					
1	グループで協力して絵を描き現在進行形を打いて、その絵の人物を紹介する。 This is Miss. He plays soccer. He likes cola. He has a brother. She is drinking cola. Thank you.	・身近な例をだし、現在進行形を使う場面をまよしく理解させる。 ・発表では正しい発音の心がけさせる。	理：現在進行形の用法を正しく理解することができる。(発表チェック) 表：現在進行形を用いて人物紹介をすることができる。(活動状況チェック・プリント評価)	・現在進行形の使い方を理解し文の意味を把握することができる。 ・現在進行形の用法を理解し、正しく表現することができる。	・現在進行形を使った文の意味を把握することができる。 ・現在進行形を使って表現をすることができる。	・グループでの助け合い活動を通して、積極的に表現活動に取り組むように呼びかける。
1	代名詞の使い方を練習する	・代名詞のそれぞれの意味を理解させ、正しく使い分けさせる。	表・理：さまざまな代名詞の意味を理解し、適切な使い方をすることができる。(発表チェック・プリント評価)	・代名詞の使い分けを理解し、正しい代名詞を用いることができる。 ・単元テストで85%以上正解することができる。	・適切な代名詞を使うことができる。 ・単元テストで80%以上、85%以下の範囲で正解することができる。	・間違えた箇所を知り、正しい代名詞を使うことができるよう支援する。 ・間違えた語句を1つにつき1分回つづつやり直し、ノートを確認できるよう指導する。
2	本語の読み道・本文の内容を確認し、本文の内容を理解する。 ・勉強しているだけでなく、手紙を書いている ・内容はタイプシザが近い ・日本語訳はどのくらいか など	・新語句の定義をはかるため、可能であるものは現物を提示するなどの工夫をする。 ・内容が理解できているか確認するために身振りを行う。 ・発音や強弱に応じてながら場面にあった表現の仕方を変える。	理：本文の内容を理解し、質問に答えることができる。(活動状況・発表チェック) 表：自分が選んだ箇所を指定し、場面に合った表現方法を使って確認することができる。(活動状況チェック)	・質問に英語で正しく答えることができる。 ・ジェスチャーなどを工夫して場面の様子をわかりやすく表現することができる。	・質問を意図し答えることができる。 ・支那語記し、はっぴりと強弱をつけて発表することができる。 ・自分の目でEメールの間違いを正しく検出することができる。	・前もって指導し、発表の想定されたことはシントを消したけれど、最後の最後まで言えるように支援する。 ・教科書の文を手本にし、少しずつ表現を覚えてからEメールを書くことができるようにグループで教えあうよう指導する。
2	本文の読みを確認する →場面テストをする。					
1	Eメールを書く	・間違えをおそれず、自分が伝えたいことを積極的に表現させる。	表：正しい文法や表現を打いて、Eメールを書くことができる。			

ころ、ほとんどの生徒が「特別難しく感じることはなかった。」「問題なく覚えることができた。」と答えた。このように、生徒の興味や実態を踏まえ、学習する語彙を選択したことで、生徒のコミュニケーション活動の幅を広げることができた。

第 章 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

本年度は語彙力を育てる英語科学習指導という主題で研究を行った。

英語を使ってコミュニケーションを図るためには、語彙力を身につけることが必要である。

(1) 学習する語彙の選択について

語彙を選択する際には、生徒の学習段階や語彙の使用頻度などを考慮し、既習の語彙ではなくても必要があれば指導した。また、教科書に出てくる基本語以外でも生徒が知りたいと思う単語・連語であれば学習支援を行ない、それらを用いて自己表現できるように指導した。それらは、生徒の実態を考えながら、ぜひ定着させたいものと重要性が低いものを区別しながら学習を進めた。定着させたいと考えたものでも、理解語彙と表現語彙とに区別した。学習後、生徒に、追加して学習する基本語について難しく感じたか質問したと

(2) 語彙の指導方法についての工夫

従来、新出単語を指導する際にはフラッシュカードを用い、文字を見せてから指導を始めることが多かった。だが今回は、1年生は英語学習の入門期にあたることを考慮し、新出単語・連語を指導する際、ジェスチャーや絵を提示し、それらに対する興味を喚起したり、可能であれば現物等を提示するなどの工夫をした。その後、それらの発音練習を行い、スペリングを提示し、書く練習をするという流れで指導した。さらに、同じ単語・連語を1ヵ月位の期間を置いて繰り返し指導することで、より定着させることができるのではないかと考え、今回は3ステップに分け、段階を追って指導した。

その結果、生徒からは「絵やジェスチャーを思

い出したら単語（連語）が浮かんだ。」「これまでよりも楽しく学習できた。」「繰り返し学習したので覚えることができた。」などの意見がでた。このように、導入方法を工夫し、繰り返し指導することで、語彙力を育てることができることがわかった。

## 2 今後の課題

語彙学習指導の年間計画の作成  
 単語・連語の書く力を育てるための学習指導方法の在り方

## 引用・参考文献

- 1 山田太郎 「教育社会の構造」第4版 P245-251 岩波書店 (昭和40年)
- 2 文部科学省 中学校学習指導要領(平成10年12月) 文部科学省 (平成11年)
- 3 英語教育10月号 (平成15年)
- 4 英語教育 9月号 (平成15年)
- 5 渡辺孝映 TEACHING ENGLISH NOW 2号 三省堂 (平成15年)
- 6 英単語最強のパワーアップトレーニング 宝島社 (平成15年)
- 7 文字・語句・学習指導のアイデア
- 8 影浦 攻 中学校英語科授業の創造と指導細案 明治図書 (平成9年)
- 9 影浦 攻 中学校英語科授業の創造と指導細案 明治図書 (平成9年)
- 10 林 洋和 英語の語彙指導 溪水社 (平成14年)
- 11 太田垣正義 英語教育学・理論と実践の結合 語彙指導と語彙研究 開文社 (平成7年)
- 12 文部科学省 「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想の策定について  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/index.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/index.htm) (平成14年)
- 13 竹蓋幸生 英語教育の科学 アルク (平成7年)
- 14 Allen, V. F. . *Techniques in Teaching Vocabulary*. Oxford University Press. (昭和58年)
- 15 Carter, R. and McCarthy, M. *Vocabulary and Language Teaching*. Longman. (昭和63年)
- 16 Francis W. N. and Kucera, H. *Frequency Analysis of English Usage*. Boston: Houghton, Mifflin Company. (昭和58年)
- 17 Hirsh, D. and Nation, P. What vocabulary size is needed to read unsimplified text for pleasure? *Reading in a Foreign Language 8 (2)*. 689-696. (平成4年)
- 18 Howatt, A. P. R. *A History of English Language Teaching*. Oxford University Press. (平成元年)
- 19 Nation, I. S. P. *Teaching and Learning Vocabulary*. Victoria University of Wellington: English Language Institute. (昭和58年)
- 20 Nation, I. S. P. *Teaching and Learning Vocabulary*. Newbury House (平成2年)

- 21 Nation, P. and Waring R.  
Vocabulary size, text coverage and word lists. In *Vocabulary :  
Description, Acquisition and Pedagogy*, eds. Schmitt, N. and McCarthy M.eds.  
Cambridge University Press. (平成9年)
- 22 Richards, I. A. *Basic English and its Uses*. (昭和22年)
- 23 Kegan Paul, London Schmitt, N.  
*Vocabulary in Language Teaching*. Cambridge University Press. (平成12年)
- 24 Schmitt, N. and McCarthy M. eds. (平成元年)  
*Vocabulary : Description, Acquisition and Pedagogy*. Cambridge University Press.
- 25 Thornbury, S. *How to Teach Vocabulary*. Longman. (平成14年)
- 26 Wilkins, D. *Notional Syllabuses*. Oxford University Press. (昭和51年)
- 

#### 共同研究者

山内 ひ さ 子 (久留米工業大学助教授)

梶原 加 代 (主任指導主事)

渡辺 恵 美 (当仁中学校教諭)

永光 美 佐 (那珂中学校教諭)